



中村俊定文庫
文庫 18
140
3



元祿十一

中
月

仁



夏

新島より此の如く 八日月 露鶴
 筑波新島原より 夏千本五 洞亀
 里の地阿毛屋筋の町友木五 子英
 笠の子 子木下園や 切通し 艶士
 里新島より中此の如く 昔史
 十本より 猿のはちき若葉の 鮮枝



竹箴をいひつゝの嫩葉は 湖月
卯酉や賤きものなりし布 徒風
柁のききものなりしや其衣 我笑
灌佛や雨露に不断の好色は 艶士
女房の行して信乃甚念佛 尺牘

杜鵑

終由古き唯はぬくはるるは 管子
をのころは遠く唯ありし時 山尺

待郵云

ほろろとほろろとや三葉我三人 和英
白根の根子死きりほろろと 白糸
猫も涙を根を鳴かば 仙化
起るれは 控投由は 深峡
時を待てば 妙也 一帆
不きは 跡は 八角
國名や 障子に 文車
礎も乾て 作年 艷士

花七五葉も京長月也

月と花の破の海を落よと重 常和
百子起こりあつら紙紙 子銀 子英
輪花外一切形は 初加子 立志
あゝ人の心はもたよ初加子 立鶴
知たれ垣根や思むあすは烟 梅月
あつらひとあつらひは 随友
花柳と清水もあつらひ 下り 蘭月
はつらひとあつらひは 艶士

越後と痒や足度此物つる角 素秋
端半 百日紅の木葉も 飛隣
水戸も東司も遠く 百日紅 俊史
折やせん扱つやゆらん 杜若 松貞
杜若 杭も水のみすくす 那 溪石
あつらひとあつらひは 誰漢
あつらひとあつらひは 透 早 松茸 岩翁
あつらひとあつらひは 牛房 山夕

吉之助時友人一

みらりの花田 ちんぬの端 梅月

法師の山 碧松 扇のふ 九梅

飯守の我皇もさむにゆきき 雄氏

去人も持たぬ扇のうら 表 松栂

幼鏝盛るる花の牡丹の 嵐雪

紅を留何と隠るる 而れ 巴水

子馬付 結集 聖あ 一月 百里

清き花や 雛化りり 遠 奉白

五月のや 和と位と 伴とせん 哲精

又月西より 高屋を 梅の香 只云

すくすく 急流を 入るる 地蔵の 露宿

藤の花や 金魚より くるすれ 其角

岡の産の 柳子より 水維の 子氏

柳子より 花の 花の 蕙の 長雅

翡翠の 花より 鳥の 蒲乃の 常陽

足の中 花の 花の 鳥の 視山

控へ成よ又友阿りやかかへる。 後士
 蝙蝠や乳母の羊よもなき髪 雖如
 子か合や蝉をうつきて海を舟 白士
 起るぬる蝉のともるや石の上 冬市
 蝉鳴や根糸を竹の枯穢 虚谷
 阿の石よもつよに蝉此郷意 中
 水清し流し沈むまこり 青洋
 廣袖の瓜置よまの神よ 其角

所あゝ観し 周水堂より 止^止水
 跡能むは流るるや軒特 木庵
 淋さや草ささき 友矩
 白面や喧嘩いたる迹のみ 青洋
 夕暮る軒條より流るる是を 記堂
 白かや溜りて流る汗拭ひ 牧士
 中かちやもれぬるのあせ拭 妻戸
 酒中を流るるの形 此汗の あせぬか 艶士

たの古是さゆあす古用うま 木戸

目枝(向)の古神子ね

十八乃明神子よすこりね 具角
月よ入る書すゆ家し涼月 直方
一り此定より通す涼み式 鋤立
着るも此涼式成屋根の上 路朋
輿長く息をうりおす涼子 有隣
むらあよいよく活すすこね 士口

明る方をもこりね涼も成 一葉

大川(出)乃よもすこりね 咸亨

りけ出でいほよ涼む文使 村矢

涼人の本かき入る河名燈 本松 文車

真方無河の道船をり

そ縁ち此鏡ちうくやすすこりね 岩翁

神龜池く棹の亭や涼も舟 山夕

擬法流えうこぬ人え夕涼 尺艸

涼舟大倉泊を 如く舟 和英
 すと舟便好り今 遊る 其角
 風よむはれ好 のすこし 艶士
 舟出りまき引 舟は涼うか 直方
 小舟如く中 小山付や蚊や草 蓬雨
 舟を此時泊り 舟の蚊を氷 氷花

筑波紀行

比叢水舟月可 舟便好り今 遊る 其角
 すと舟便好り今 遊る 其角
 舟出りまき引 舟は涼うか 直方
 小舟如く中 小山付や蚊や草 蓬雨
 舟を此時泊り 舟の蚊を氷 氷花

おろしゆきと桶にさやこもんうき
おもさくと夜多命のまよかけあ
らまらんあまもたけいりあま縁あ
やと年とむまと松のまのみなと松
かたの神のまもかたに松と
つらと松とまもあつらつら
おんあまのまも松とけまよいま
まもらたゆつと松とまよの
松のまよとまよのまよとまよ
一は松とまよとまよとまよ
おの松とまよとまよとまよ
あまもあま

夏彦の鳥のまよとあまのまよ

けいこひちちと松と松と松と
年とまよと松と松と松と
くもとまよと松と松と松と
まよとまよと松と松と松と

まよとまよと松と松と松と

七里松と松と

川のまよと松と松と松と松と
松と松と松と松と松と

まよと松と松と松と松と

男辨女辨稻村権現 三拜

此後山を昇り鼎の湯燈が

こゝに在り

こゝの川の国を流るる水は

水戸路へおちてくまの涯を過

るまきぬ本宿のまき

こゝにありてはたけは遠くは

水戸坂の傍にたふしは波の

山をらへては舟のたけは

やうなまき此は舟のたけ

くらぬは舟のたけ舟のたけ

常毛のたけは

涼引や蛇うらわの

磯崎大明神

赤鬼のかたき

は神のいふ

赤鬼のいふ

あをせり

魚のたけを

こゝにありては

こゝにありては

後あきとんきも風雅
心けり知あうくくわの助
たふくふあまのみそ 日格

艶士稿

首尾

鎌倉

綿入の蚊まぶ城も端在 仙子

若くは毒木もある十の月 艶士

児太鼓焼心毒目 仙人 同

狭子いせしは折と昔ふ小刀子

よふ年てのまよふは秋 全

いともわきて鳴るは葉 士

那路の鳥難波の舞鳥帽子 子

卯とも昔の御多子 全

古衣はるや歌はと 士

親よりはるる病る 子

はなまの藤の小折はあま 全

さかひもは何れもい 士

下

雜夏

尉がさきそとてか形を移る
五月の今も懐く人遠く小原
此食ては乳の乳母さむい
五月物さきそとてか形を移る
石井や畦の隣りもさき
吾もや移るは懐く一そ
何れと移るさむい

聊和
松白子
詞言
盤谷
立嘯
仙子
立圃

槐

初槐子筆新くさき
因縁を移るは懐く一そ
暮れの中は移るは懐く一そ
阿さきよは懐くは懐く一そ
いさつ角や春の地を移るは懐く一そ
竹も春や春は懐くは懐く一そ

立鶴
赤川
晚翠
立志
八士
松栞

玉系まゆみふらへ影さ系
 分我
 魚まらうよ二親あまらさう子貴
 溪石
 送中や新と海らんあう色川
 咸宇
 入る念とどり燈籠とどりり
 其角
 阿らまゆるせし角はを切巻
 青洋
 看板の柱よあういさうこい
 菑枝
 喰付くしまりが腸也何と相撲
 子氏
 といし神りらう何色はお権元
 岩翁

小娘のしんをさう一かけ踊
 其角
 橋水饅頭さうち止や踊水
 露宿
 丑三や踊らう込揚屋町
 夕柵
 知れず振て揺さうもあふ
 至町
 抱へばし自身は西風壇つ
 乙中
 め雑魚も流遊をちら一葉
 宍柵
 山甲や一葉らり此禪の茶モエ
 梅月
 この花を酒の桐さうと壇心
 分我

麩棒のふちひも青し 初志もくも 淮漢
水汲さそつとよけらる 芭蕉成 木下
芭蕉葉よ梅の子澄む此も成 玉夕
船風も芭蕉をあつる 藤原成 孟船

月

誰提し細乃ちち枝橋成月 沾徳
船成り枝成破れ月成り破成成 不角
月や照しよしよ降る水龍成 俊更

旅笠成成鳥よきせり 月成成 躍亀
水月成成り成成 吉成成 一帆
おし成成成成成成成成成成 八角
船成成成成成成成成成成 尺成
美成成成成成成成成成成 流成
吹成成成成成成成成成成 舟成
一箇の下成成成成成成成成 山尺
秋成成成成成成成成成成 松成

清まると石で櫓押新柄式士口
 幾日経く萩のこゝろ 雛籠 山夕
 暮の秋や花縁の帯いと世 梅月
 初夜の子葉やすし延生此肌 木色
 細川は餌を信じて阿あけ笑 友矩
 白き塙にたのまうつま徳成 宋人
 昔ふれぬの秋や 穂の香 常和
 椿きくく日少程此きぬる瓜 杜

以て秋の川雨の砧うね 簾袋
 絲休より何よりかきく枝の香 止水
 立結法より一葉少よの物さけり 言求
 古の歌の娘もむさめも川ゆか 白絲
 春の紫の庭を此居の靡き成 無倫
 種あすといひうよけ世よ物下 快易
 昔の平をさし加はれ白菊自ぬら 直方
 十三秋下 空は深し ひと川 一峰

卷中此の如く同「秋の言 鋤立
 菊ももろも狗も細成り燗茶 文車
 秋をいひおる侍はよき三人 杖竹
 空を楓や名を隣よつて重く 和英
 中村小長上京餞別二句
 古の何よされとや 秋の風 艶士
 菊もあふ甘う 湯もく思あせ 青洋
 上京とく尸あす
 秋風のこもて 今に秋 蚤ち座 小長

丁丑仲秋

幾とせらるる各月の客館亭下く詠文
 一しぬこころもさるるのさくよはりませ
 好みなりとせあふるのむらに邪た
 和も婦娥の満美いひよ棄及に

名月はや十所めすは朝日影 岩翁
 須方人の嚏もさるるの月 松貞
 りぬはわか子遠らんあつ月 調和
 恋せたるは夕月の賤維かを 山夕

名月や鈴屋堂の姉の山さく 常陽
 月あまのしるはるや 昭々 和英
 名月やむらさき 藤屋の内 岩泉
 築紫とあまのさや 夕月 尺牘
 名月や娘の二階のうらさ 快易
 名月よ作のさく 壺と種 松翁
 我酒を回どしお新よ 七糸 艷士
十五夜の目見字の分
せうぼく ともね

名月や金谷ひさる雨の友 其角
 名月や海ら流のさく 嵐雲
 名月やまもこのぬき 挙白
 名月の欲目小極よの 女 秀和
 月破とく包ふもむの辛 不角
 新しき銀河やまのさ 無倫
 喰立の山ねるや 東潮
 名月やまのさく 帆げ 素秋

夕らるゝや九つ時分物の種 木苑隣
 誰かこゝに頼るらんなる花月 神寂
 夕霞をゆくまのげよ廻るらん月 夕我
 周ワリる花あふまのりさる花月 子英
 直さや鶺鴒イカガ乃菊の甲のこゝ 長雅
 夕月やいづくか安ん京乃家 止水
 夕る経路をゆくげの月を不 青洋
 月一月のこゝの宿の早くと食へ 木下

家々醉醒 欄光さるる夕

夕暮月や誰か頼るらんなる花月 観山
 夕霞をゆくまのげよ廻るらん月 仙化
 海を渡るらんあつせきおの月 百里
 夕舟さるらんやさんらん月 虚谷
 望月やこよひ二星の多るらん月 風調
 夕らるゝや草花を頼るらん魚の叔 仙鶴
 夕月や所居る橋を水乃る 碓氷
 夕月や洲を渡るらん花月 立志

は世の人をうひつゝ縁中り
は初多れ約なき人常事と

あつしや若るまゝ一喜少後也 艶士

鶴も鳥に教生金指まゝとて信をの
日くけくちあつ下のやとりよ依り誠業の
の面におつしううお明水も
雪
雪方れあつしきしく業人常事と
神のほつしや若るまゝ一喜少後也
志はまじり松の嵐も形をとあ也

急な山に雪の降るお田舎屋 嵐雪

冬

山市晴嵐

河代よむ山先痛し 雪も風 吟句
都さお口のそし 帰也 谷水
一志手やと楓も出たり 返り花 立志
木あ候のやとり葉をけしつ山色そ 子英
捨すも干よ又ちるふ山を来 岩翁
うねくも石よりそれもあまふ 防嵐

紫の戸に香炉棚なる山系紅山夕

花さくす石路や水の中は心の霊長推

まよ海の根を翫てみる枯野白絲

石の跡よまをたまやみ鏡仙鶴

又よ日や天剣の橋は一席り一止

松雪をぬき入袖や神の面を白士

阿蘇のうま松花鹿や神むくく曙雲

ある帰る月影清きる松詞泉

伽羅及ふる此床やまはり船青洋

小夜子なる立相いぬせくう懐底随節

方角よ凝ルや生海風の器秀和

あゝ縄は揺るけりけり服子木下

相口は背中小鏡を照りて山

まよかまを呼吸まきりし影の影

又よ信葉いさつらまお霞士口

朝も新難のありまらや相懸我笑

下

廿二

下
船前を極る 沖の石 神牧
言新や護摩の如く ちれ松 子氏
一汲無きもれも必 桔槔 湖月
修徳の内ねる何れかの言 岩翁
常りせは船のちるる 壺の 柳洞
猫のふれぬめ 投ぬ言ぬ布 三東
林はほり氷程もや ち河の 其口
江の隅の少く閑る ち河の 菅枝

冬にわる飛るや寒の水 深峽
炭し煙むし ち河の 立鶴
御まをたはぬのち河の 専吟
新にあらや 狸の隠る 艶士
はの成の地をち河の 難波 蹴卯
御まをたはぬのち河の 直方
言新やあつるのち河の 駿士
言扇

其六二

女房の月を又せたり暮の音
己^コ情の 鉄炮を^ク 艶士
粘り^シる 孟^メ庵へ 投^トけ^ケる 槻山

其三

孤^コの^ノ 地^チを^ヲ 踏^フて^キ 腹^{ハラ}を^シて^ス 青洋
海^{ウミ}の^ノ 氷^ヒを^シて^ス 艶士
極^キを^キ 留^ル子^コは^シ 艶士

追加 岩城より賜之

房^フり^マる^ル 時^{トキ}を^シて^ス 一^{ヒト}里^リ 露^{ツキ} 沾^ツ
黒^{クロ}く^シ 録^{ロク}し^テ 時^{トキ}を^シて^ス 新^{シン}山^{サン}
智^チの^ノ 命^{ノチ}や^ハ 根^ネを^シて^ス 里^リ 風^{フウ}

雪五章

あ^あの^の 宿^{しゆく}や^や 木^きの^の 音^ね 激^{げき}
鳥^{トリ} 裸^{はだか}り^り 松^{マツ} 城^{しろ} 木^き 木^き 下^{した}
お^おの^の 向^{むか}ひ^は 木^き 根^ねを^シて^ス 青^{せい} 洋^{やう}

其六二

女房も凡そ久せり蓑の巻
し中
己コトリ情の移り飽き鴨
艶士
新りよる石の庵へ投あけ
規山

其三

新りし記席で腹もやせと
青洋
ぬり言の移り氷六角
し中
趣を帯子は移りの海より
艶士

其四

室や鳥飼を養うも山の色
木下
前庭あゆむ 大冬を此指
青洋
童舎の子はあり財布は世々
し中

其五

唱流好らやいまむぬる言
艶士
推推了了るよ火種余の目造屋
規山
下
振振りし水は移る言つらん
木下

堀
の
ね
か

追加

之程の花火とともを女郎也

艶士

徑乃露を踏んで廣き燈

記堂

とて我婦娥の衣は白くは

子英

ぬき人なりや捧らるるり

長雅

中世より隣り音までむつり

止水

銷屋へいびとらぬ焼く

士

大の子も尾張でよりの尾の旗

堂

車ひり人のちりく海舟を

英

ゆねねといぬらぬの起りて

雅

心も海の色を様々あて

水

ハリカ子 御後よ葉を将子とゆ

士

あゝとめ和尙の足跡 追従

堂

萱姫よとまらんぬる日とて

英

一既より流るるもら月の約

雅

下

廿七

名
 秋風を小栢屏風よ捲よせて
 をまこと包れぬ安きあり
 昔か家初こころく鞠蹴を
 層は少むくより安くゆく
 るを明きなきを睡乃つら水
 元まゝゆき新遊此にこそ
 代たたくるふ月の艾九月菊
 捲ぬところろがわたり病人
 堂 英 水 堂 英 雅 士 水

瀆私のとけり此何の世継ぎ場
 馬れいりよちよのうぬる
 秀乃自れく喧嘩あつし誰より
 安信と名乗るを此も名乗る
 出家なきしうそとて古物め
 何儀すもくかりを鬻去教
 此文の存多しに社に橋をり
 下 昔影よ伐せ 林はく月
 士 雅 水 堂 英 水 雅 士

燐の夜寒孤村の心身我
 空を抱ゆく 幼乃 鞆
 月乃及ふきのめくく 年比布
 都れうつろ水道よはめ
 花の如葉年提燈 くりり
 下なる重 年自胡葱
 英 堂 士 雅 水 筆

此集成にて机中より持来り
 艶士のつらに艶士艶ハ美セ
 手書は且月の夕よ吹の切句と
 おりあふまは花なり 遊こみ
 雅にみく世人は風を吹て交り
 如十人同食一人獨飽ん
 くりりき想を志くあはれ志
 控りく道常の素竹軒西路より

志をいとしりてき^{モト}松をかうぬえ
予の門下信從せん^ト事^トもいふ
との葉れ葉れをいれ^ト事^トもいふ
秋^トの葉かきの味ひを忘^トらん
とあり姑^トを^トあ^トぬ^トらん
背^トを^トあ^トぬ^トらん
調和

元禄十一^{戊寅}歲 初秋日 板元平松所 立羽不角

